言葉のあいまいさ、不合理さは、文字に関係がない。

人々の生活態度や思考に原因がある。

「あたりまえ」という言葉があります。この言葉の生れは、日影のものですが、今はもう、れっきとしたものです。「あたる」と「まえ」との複合語ですが、意味は、「あたる」にも「まえ」にも関係がありません。「前」は「然」と音が同じであるところから、「当然」の代りに「当前」と書いたものを、「当」に「あたる」の義（訓）があり、「前」の訓は「まえ」ですから、ふざけて「あたりまえ」と読んだものです。「ロハ（只）」などと同列の言葉で、まじめな言葉ではなかったのです。いや、「言葉」の名に価しないものだったのです。しかし、起源はどうであろうとも、今では、私たちの日常の会話に欠くことのできない、りっぱな働きを持った言葉になっているのです。「そんなこと、あたりまえじゃあないか」と言った具合です。この場合、これに代るべき言葉は他にないでしょう。本家の「当然」では、日常の会話には少し堅過ぎる感じがします。

「当然」が、「当（まさ）に然（しか）るべし」の義で、誠に由緒正しい用法による合理的な言葉であるのに比べると、「あたりまえ」は、卑しい言葉であり、不合理な言葉であるにもかかわらず、私たちの気持を表現するのには、これに代るべき言葉がないほど、今は完全な言葉になっているというこの事実、ここから、私たちの使う言葉というものは、このように、誠に理屈では割り切れないものがあることを、知ることができます。不合理だとか、あいまいだとか、ある点だけを取り立てて非難すれば、誠に弁解する余地もないほどの欠点を持つ言葉でも、多くの人に愛用されれば、りっぱな言葉として通用するものであり、その反対に、理論的にはいかに正確であり、合理的な言葉だと言っても、世の人々に使用されなければ、何の価値もないのが、「言葉」というものなのです。

私たちが、学校の算数の時間に、子供たちにやかましく使い分けることを要求し、それを実行させている言葉に、「時刻」と「時間」があります。「時間」は文字通り、「時刻」と「時刻」の間の意味です。ところが、算数の時間にはやかましく区別することを要求しているこの先生が、遠足のお知らせをする時になると、「集合時間は八時ですよ。時間に遅れないようにね」などと、平気で言っているのです。

しかし、言葉というものは、大体がこんなものなのです。「時刻」と「時間」と、内容を異にする言葉が、私たちの生れる前から、ちゃんと存在していて、私たちは、特に意識して使用する時には、両者を区別して使うことができるのですが、実際生活では、一向に厳密に両者を使い分ける習慣ができ上らないのです。そして、私たちの指導する子

供たちも、算数ではやかましく指導されて、最初はりっぱに使い分けるのですが、世の中の多くの人々が両者を混用していると、その使い方にいつしかなじんで、小学校を卒業する頃には、人並に混用する習慣がついてしまうのです。「時間」と「時刻」とを正しく使い分けることは、合理的であり、望ましいことであるに違いないと思います。ところが、その合理的なものが、一向に世の人々に用いられないのが、現実の姿でもあるのです。

このような例は、挙げれば限りもなくあります。「声が低くて聞き取れません」という言葉は、電話でよく使われよすが、これは正確に言いますと、「低い声」ではなくて、「弱い声」です。それは、小学校の子どもでも理科や音楽で学習していて知っていることです。しかし、「声が弱くて聞き取れません」とは、誰も言いません。また、図画で、いろいろな色の名を細かく分けていますが、日常生活では、相変らず、「青い顔」「青い空」「青い葉」などと、同じ色であるはずの「青」が、いろいろの「色」を表しています。「青い顔」なんて、青鬼じゃああるまいし、そんな顔色があってたまるものか、と言うのは理屈です。心配している母親の顔の色を、どんなに正確に言い表してみたところで、「青い顔」という表現に及ばないとすれば、この不合理な表現も、世の人々が棄てないのは、むしろ「あたりまえ」のことだと思います。

言葉というものは、こういうものです。言葉でも文字でも、初めからあいまいだった、というものはありません。ところが、「漢字、漢語は、その持つ意味があいまいで、正確な表現ができない」と言って、漢字や漢語を非難する人があります。これは、はっきり言って間違いです。漢語をあいまいに使うから、あいまいになるのです。もっとはっきり言えば、よくわからない漢語を、わかったつもりで使って話すものだから、内容がぼやけてしまうのです。これは「あたりまえ」の話です。また、あいまいな表現を好んで、故意にあいまいに漢語を使う人がいます。これもあいまいになるのが「あたりまえ」です。だから、あいまいがいけないのなら、あいまいな使い方をしないことです。そうすれば、どんなに漢字、漢語を多く使っても、決して表現があいまいになるということはありません。罪は漢字にも漢語にもないのです。

よく言われるものに、「白髪三千丈」という言葉があります。「三千丈」は決してあいまいな言葉ではありません。あいまいどころか、内容は実に明瞭なもので、一丈（十尺）というある決った長さの三千倍のことです。もちろん、そんなに長い髪の毛はあるはずがないし、そんな髪の毛を想像する者もありません。正確に言えば、その何万分の一にも当らない「一尺五寸」であったかも知れないし、あるいは「一尺二寸」であったかも知れません。しかし、どんなに正確に測って、それを

数字に表してみても、「愁によって、かくのごとく長し」という句に続くものとしては、この「三千丈」に及ぶ表現はないでしょう。それは、私がそう考えるだけではありません。この詩の作者がそう考えたのであり、世の多くの人々もそう考えたからこそ、この表現が生れ、また、今に至るもなお多くの人々に、この詩が愛唱されているのです。

「言葉や文字というものは、国民性の現れである」と言われるのは、この意味においてです。だから、言葉や文字が良いのも悪いのも、すべて、国民である私たち自身に、その責任があるのであって、決して文字や言葉にあるのではありません。私たちが良ければ、文字や言葉も良くなり、私たちが悪くなれば、文字や言葉も悪くなる、というものです。それを、文字や言葉があいまいだとか、不合理だとか言って、これを改めてみたところで、私たちの生活態度があいまいを好み、不合理なものであるならば、どんな正確な表現も、どんな合理的な言葉や文字でも育たないことが、先に挙げた「時刻と時間」の例で、私たちは経験ずみです。言葉や文字のあいまいさというものは、外在するものではなくて、それを使用する人の側にあるものであることを、知らなくてはなりません。だから、ある意味では、「美しい言葉」というものは、初めからそういうものが存在しているのではなくて、実際には、「美しい人、りっぱな人によって語られる言葉」のことを言うのです。つまりまったく同じ言葉でも、それが語られる人によって、ある場合には「美しい言葉」とも聞かれ、ある場合には、「醜い言葉」とも聞かれるのです。「美しい言葉」とは、現実には、多くはそういうものであることを、誰でもきっと経験しているに違いありません。「美しい言葉」を求めるのは、「青い鳥」を求めるのと同様で、外にこれを求めるのは、誠に空しい行為と言わなければなりません。私たちの生活態度を「実態」とすれば、言葉や文字は、その「影」なのです。「影」を追い回して捕えたと思っても、「実態」が動けば、捕えたはずの「影」も、いつの間にか、手の中から逃げて行ってしまっているのです。

国語問題を解く鍵はここにあります。そして、わが国の国語改革運動のあやまちの第一も、ここにあるのです。国語改革論者は、地上に映る虫の影を、虫そのものと勘違いして、追いかけ回す猫のように、言葉や文字が、私たちの生活の影であることを知らないで、改革のねらいを、言葉や文字そのものに向けています。改革するものがあるとすれば、それは、「生活態度」や「物の考え方」の方であって、それが改革されれば、言葉や文字も自然に変化するはずです。それに、言葉や文字の合理化は、すでに述べられたように、良い言葉や文字に必要な条件ではありません。この点でも、彼らの考えは誤っていると思います。

次に考えなければならないことは、外から作為的に行われた国語改革というものは、見た目に花やかで、合理的に見えても、それは言わば造花の美しさで、自然の花に比べたらまったく魅力がありません。作為的な改革などしなくても、自然なる言語活動は、絶えず、美しさを求めて変化し、成長しています。美しい言葉でも文字でも、その自然なる言語活動の中から、いつともなく生れて来るものなのです。

当用漢字表を企図し、これを遂行した人々は、（当用漢字が文字通りのものであるならば、それは認められる。それは私たちの生活を助けるものだから。しかし、内閣訓令という形で、私たちの国語生活を拘束するものではとても認めることはできない）これらのことに気付かないのです。文字でも言葉でも、自分たちの思いのままに変えることができ、それが良いことだと思っています。花を手折り、枝を捻じ曲げて、それを、花を愛する者の行為であるかのように錯覚しているのが、国語改革論者の「国語の愛護」なのです。美しい言葉は、必ず生きた言葉であるはずです。それは、造花のように、国語改革論者の手によって、作為的に作り出されるものではなく、また、作り出せるようなものでもありません。造花はどんなにりっぱに作っても造花です。名もない、小さな花でも、自然の花の言うに言われない魅力を持ったものには、とても及ぶものではありません。

美しい言葉は、常に、民衆の中から生れて、民衆と共に生き生きと発展して行くものです。育ての親は民衆ですが、生みの親は民衆の中にある、詩人とか作家とかと呼ばれる人たちです。これらの詩人、作家たちは、私たちの民衆の心に最も快く響く言葉を生み出しては、私たちに呼びかけ、歌いかけてくれます。そして、私たち民衆がこれに和した時、それが、新しい「美しい」言葉としてこの世の中に生長するのです。だから、いくら詩人といい、作家だと言っても、独りよがりの詩人、作家は、この「美しい言葉」の創造には無縁の存在なのです。

わが国の国語運動の悲劇は、これを推進しようとする人々が、民衆と共にある詩人や作家たちの協力を得ようともしないで、そればかりか、これらの人々の反対さえ無理にも押し切って強行しようとしている点にあります。これでは、東京から京都へ行くのに、東北線の青森行き列車に乗るようなものです。どんなに日本語のためだ、と声を大にしても、決して日本語のためにはなりません。わが国の図語運動は、まず、私たちとの感動を呼び起してくれる詩人や作家たちとの協力を得るようにしなければなりません。